

イラストレーター・真鍋博の描いた移動体の未来像に関する研究

A Study on the Future Image of Vehicle by Hiroshi Manabe, an Illustrator

竹内孝治（愛知産業大学造形学部建築学科 専任講師）

Kohji TAKEUCHI (Assistant Prof., Dep. of Architecture, Aichi Sangyo Univ.)

高度成長期に量産された数多くの未来画の中で、今日においてもなお高い評価を受けるのが、真鍋博によるイラストレーションである。真鍋は万博関連作品を数多く制作したほか、『自動車じどうしゃ』や『自転車讃歌』などのイラスト集を發表し、並々ならぬ移動体への愛着と関心を披瀝したことで知られる。真鍋はイラストレーションのほかに、数多くのエッセイを残したことで知られる。特に『歩行文明』(1974)や『未来行き列車に乗って』(1973)ではユーモアと獨創性に溢れる移動体論を展開した。これらエッセイ群は、文明批判を通して移動体の未来像を描いたものであり、真鍋が想定した「未来」である現在こそ再読が求められる。そこで本研究は、真鍋博が数多く發表したエッセイやイラストレーションから、特に移動体に関するものを収集・分析し、真鍋博の独特な移動体論を明らかにする。

Amidst the glut of futuristic imagery mass-produced during the high-growth period, the illustrations of Hiroshi Manabe remain highly esteemed even today. In addition to producing numerous works for the World Expo, Manabe also published collections of his illustrations such as *Jidōsha* [Motorcars] (1971) and *Jitensha sankā* [Bicycle Hymns] (1973), and is noted for his expressions of interest and passion for extraordinary forms of transportation. In addition to his illustrations, Manabe has also published numerous essays. In particular, *Hokō bunmei* [Pedestrian Civilization] (1974) and *Mirai-yuki ressha ni notte* [Riding the Future Train] (1973) developed this theory of bodies-in-motion with an abundance of originality and humor. These collections of essays depicted a vision of the future of transportation through a critique of civilization, and call for a contemporary re-reading of the “future” as Manabe envisioned it. This study thus seeks to clarify Hiroshi Manabe’s distinctive theory of Vehicle by drawing on his numerous published essays and illustrations, particularly by collecting and analyzing those concerning modes of transportation.

1. 研究目的

高度成長の最盛期に位置する 1960 年代に量産された数多くの未来画の中で、今日においてもなお高い評価を受けるのが、真鍋博(1932-2000)によるイラストレーションである。真鍋のイラストレーションは「未来都市なら真鍋博という時代」と評された他、万博関連作品を数多く制作し、併せて『自動車じどうしゃ』(1971)や『自転車讃歌』(1973)などのイラスト集を發表し、並々ならぬ移動体への愛着と関心を披瀝したことで知られる。

ところで、真鍋はイラストレーションのほかに、数多くのエッセイを残したことで知られる。内容はイラストレーションに関するものはもちろん、教育論から文明批評、旅行エッセイなど多岐にわたる。特に『歩行文明』(1974)や『未来行き列車に乗って』(1973)ではユーモアと獨創性に溢れる移動体論を展開した。これらエッセイ群は、文明批判を通して移動体の未来像を描いたものであり、真鍋が想定した「未来」である現在にこそ再読すべきテキストではないだろうか。

そこで本研究は、真鍋博が数多く発表したエッセイやイラストレーションから、特に移動体に関するものを収集・分析し、真鍋博の独特な移動体論を明らかにする。真鍋の描いた未来像へ、移動体論を位置づけ、新たな移動体創出に向けた視座獲得を企図する。未来の社会・生活ビジョンを描くことが困難な現状を打開する視点を得ることが期待される。

2. 研究経過

(1) 時代背景の整理・考察 (2012年4～6月)

既往研究レビューの知見をもとに、1960年代当時の時代背景を、特に“万国博”や“未来学”周辺の言論・表現活動に着目して文献の収集整理・考察を行った。文献調査に際しては、国会図書館、各大学図書館、県立図書館・美術館等にも、真鍋の諸活動に関する資料・文献の調査を行った。

(2) 著作分析 (2012年7～8月)

①分析対象：真鍋博の移動体論を明らかにするために、彼の著作群（共著含む）のうち、自動車や自転車、移動すること等を主題とした『自動車じどうしゃ』(1971)や『自転車讃歌』(1973)、『未来行き列車に乗って』(1973)、『歩行文明』(1974)等を対象とした。

②分析方法：対象とする著作から、移動体に関する発言を悉皆的に収集・整理しその言及内容を主題別および年次変遷から分析を行った。

(3) イラストレーション分析 (2012年9～12月)

①分析対象：真鍋が描いた移動体の未来像を分析するために、真鍋の作品集2冊(1975,1984)の他、美術館の企画展図録3冊(1996、2001、2004)掲載の自動車、自転車等の移動体関連作品を抽出し、分析対象とした。

②分析方法：著作分析で得られた真鍋の移動体に関する思想内容を手がかりに作品分析を進めた。表現内容を主題別および年次変遷に整理分類し、そこにみられる移動体の未来像を分析した。

(4) 研究の総括と報告書作成 (2013年1～3月)

上記作業により得た知見を総括した上で、研究報告書としてまとめた。これらの知見をもとに、これからの移動体とそれを支える社会を考えるためのティップス集を作成すべく作業へ入った。

3. 研究成果

3-1. 1960～70年代における移動体論

東京オリンピック(1964)やベトナム戦争(1965-75)などによる特需に後押しされ発展を続けた日本経済は、日本万国博覧会(1970)をエポックとして高度成長期の頂点に達する。万博を日本全体が世界に戦後の発展をアピールする契機と位置付け、都市整備が空前の熱気と速度のもとに進められた。時代はまさに「バラ色の未来」を約束するかのように受け取られた。

こうした機運と歩調を合わせ、1968年には梅棹忠夫、加藤秀俊、小松左京、林雄二郎らによる日本未来学会が発足し、現実の論理的・科学的観察に基づく将来予測が社会現象となった。真鍋も未来学関連人脈との親交を深め、領域横断的な活動を見せた。モータリゼーション時代の都市を構想した建築家・丹下健三や建築評論家・川添登(『移動空間論』(1968)の著者)、小松左京、岡本太郎、林雄二郎といった人物との交流は、真鍋の移動体論へ少なからぬ影響を及ぼしたものと推測される。

3-2. 真鍋博にとっての「未来」

真鍋は当時横行していた紋切り型の未来イメージを批判し、「未来は可能性をふくんでいる。未来は一つではない。いろいろのビジョンがあっいいい。未来は方法やアイデアやパターンではなく考え方であり思想である」と語った。こうした考えのもとに多様な未来イメージを数多く描いていった。

真鍋の発想する未来像は、中央から周縁へ、文明から文化へ、固定から流動へ、二者択一から多者択三へ、など固定観念を破壊しながら新たな可能性を探るという姿勢が一貫している。そして、そうした多様な発想を生み出す手法として語呂合わせやダジャレ、アナロジーが数多く採られている。

また、真鍋は、当時の未来ブームに抗するように、自身の描く未来像は「のほほんど待っている夢の未来」でないことを強調している。「経企庁の白書が発表された時もマスコミは、車は一家に一台だとか、米の需要が減り、肉の摂取量がふえるとといった“未来未来”した角度ばかりをとりあげた。ぼくはそうした一面だけでなく、老人がふえたりゴミの処理が国家的問題になるといった来たるべき時代の内面まで包括した未来をここで描きたかつ

ただ。だからこれは早く来い来いとのはほとんど待っている夢の未来ではない。待ちのぞむべき未来のために解決していかなければならぬ未来である。そしてあくまで自分の考える日本の未来である。自分で掴みとりたい、実現させたい未来である」。真鍋にとっての未来は、ブームと化していた未来像とは異なり、むしろそうした観念への批判的視点に立ったものであることが看取できる。

3-3. 真鍋博の遊び観

真鍋の移動体論を読み解くためには、彼の遊び観を確認しておく必要がある。なぜなら「遊びの未来を創ることは未来の全てを造ることである」との発言にみられるように、真鍋の描いた未来像の基盤には「遊び」への眼差しが認められるからである。

真鍋の遊び観は 1960 年代以降のレジャーブームに形成された画一的な遊びの在り方を批判しており、多様性を重んじ、個人個人の自由な選択性確保を重視した。また、遊びと労働、休日と平日、行楽地と勤務地といった線引きへも懐疑的であり、多様な遊びの在り方を、彼独自の造語を交えながら提案している点に特徴がみられる。

3-4. 著作にみられる真鍋の「移動体」論

真鍋は文章を書くことはイラストレーションとしては表現しきれないものを描く、「活字によるイラストレーション」であると位置づける。そうした考えのもと語られた移動体への言及について著作群から悉皆的に収集・整理を行った。主な言及箇所を列記する (表 1)。

真鍋は自動車単体ではなく、「都市構造やライフスタイルやエネルギー問題」との連続性において検討すべきと考え、未来の交通を「豊かな社会のなかの乗り物」、つまりは人がイキイキと生きる物語りへ位置づけるという視点を重視した。そして、自動車が良いか悪いかの二択でなく、「いろいろの価値体系のなかで選択できる豊かさとそれを自分の生活に生かせる手段の豊かさ」が伴うことを強く求めた。併せて、移動体を所有することの意味変容や、趣味性・遊戯性が重視されることも指摘している。

1970 年代になると真鍋はバイコロジーやユックリズム運動に参画するが、自動車も同じように愛し続けた。それら全てが共存していける社会こそが豊かであり、そうした社会を構想し実現する主体は専門家ではなく、「われわれ自身」であることを訴え続けた。

表 1 真鍋による移動体に関連した主な言及

<p>農村と地方都市の一部をのぞいてマイカーの実用的な価値はほとんど失われ、車をもつ意識さえ完全に変わってしまった。人々はいろいろな車に乗ってみたいからハンドルをにぎる。所有より体験への欲求だけである。(絵でみる 20 年後の日本、1966、p.85)</p>
<p>たった一枚の明日の車を描くのに、車そのものを描く前に、まず車の走る道路を考え、その道路の横たわる都市を考え、その都市で営まれる人々の生活を考え、そんな都市と都市とが情報とエネルギーで結ばれるメガロポリスを考え、車一台を考えることはいつも日本列島の未来すべてを考えることになってしまうのだが、車は乗物というより、いまや都市の環境であり、都市の自然でさえあり、車社会といわれる今日、車はモーターゼーションであり、モーターショーはモーターゼーションショーであらねばならないのだ。(真鍋博の複眼人間論、1971、p.175)</p>
<p>豊かな乗り物社会、いや、豊かな社会のなかの乗り物は、スピードの豊かさにあふれていなければならない。(中略)スピードがいろいろの価値体系のなかで選択できる豊かさとそれを自分の生活に生かせる手段の豊かさが、未来の交通の核なのである。(自転車讃歌、1973、p.107)</p>
<p>人は今日も動いている。動きこそが生命だ。だがその動きの速さはけっして一律ではない。人間速度四キロをもとにしたいろいろな速さだ。それが未来の速度であり、豊かさだ。4キロ、8キロ、16キロ、100キロ、1000キロ、そして20キロの自転車が……。 (自転車讃歌、1973、p.126)</p>
<p>人間の移動には、もちろんスピードも要求されるが、ユックリもまた不可欠の条件だ。ユックリ走ることをもう一つの条件にした車だったら、ユックリ走っても空気を汚さず、不経済ではないだろう。走るだけの車でなく、歩くことのできる車、それが未来の車だし、人間のための車だ。(歩行文明、1974、p.214)</p>
<p>新しい都市は、新しい乗物によってイメージされるし、新しい乗物はまた都市の新しい形をイメージさせる。もちろん、科学技術の発達が別の次元で新しい乗物を発生させることはよくあることだが、それをどうアレンジし、都市のなかへ持ち込むかが次の問題なのだ。(歩行文明、1974、p.218)</p>
<p>新しいクルマ、クルマにかわるクルマ、クルマを超えたクルマを考えることは、新しい乗物だけを考えることではない。それは乗物中心に考えるのではなく、むしろその側面—都市構造やライフスタイルやエネルギー問題から考えねばならぬことになるはずである。(イラストからの発想、1978、p.66)</p>

3-5. イラストレーションにみられる「移動体」

(1) 真鍋にとってのイラストレーション

イラストレーションは発注者がある特定の条件のもとに依頼し、その発注者の諾否が決定権を持つ点に特徴がある。また、画題は何らかの事象・物象を「説明」することを旨とする。真鍋はこの特性を活かし「目の前にあるものをリアルに描くのではなく、目に見えないもの、未来的なもの、SF的なもの、四次元の世界といったもの」を積極的に描くことに可能性を見出している。

あわせて、真鍋はイラストの機能を「対社会的な量産性志向」のほかに、「描くという行為をとおして思考するという方法がある」とし、それが「発想の転換、思考の増幅に役立っている」であり、また「理想をさぐる視覚的シミュレーション」であると評する。さらには、「夢として語られ、想像されたものは人間はいつか抵抗なく受け入れる。まして絵になるということはこういうものができてほしいと多くの人が望んだからで、結果的にイメージが浸透し、社会的に認知されていく」ということから、未来を描くイラストレーションは「SFアセスメント」としての側面を持つとした。

このように、真鍋はイラストレーションを未来のビジョンを思考する方法「視覚的シミュレーション」や「SFアセスメント」として捉えた。そこでは「物事を言葉やデータ、数字、記号で考えると、どうしてもある結論を引き出してしまいが、色と形、そしてイメージでとらえるかぎり、現実と非現実の中間、過去と未来の接点、いやそのどちらにもつながる複眼の視点で見、とらえることができる」としている。イラストレーションは異なるものをつなげ、遊び心や複数性・多様性のあるイメージを表現するのに適していると考えていた。

(2) 移動体を主題としたイラストレーション

移動体を主題とした著作として『自動車じどうしゃ』と『自転車讃歌』が挙げられる。そこでは過去から現在、未来へと横断する移動体のアイデアが、鮮やかな色彩で表現されており、実現可能なものから明らかに実現不可能なものまでが数多く描かれている。共通しているのは、独創的なアイデアに基づいて描かれた移動体とそれがもたらす気づきであり多様性への共感である。読者は否応なく発想することを求められる。

(3) 未来画に描かれた移動体

真鍋の描いたイラストレーションには、移動体を直接の主題とはしていなくとも、必ずといってよいほど何らかの移動体が描かれている。

未来都市を描く際に真鍋は好んで移動体を描き込む傾向がみられる。そこにはあらゆる種類の移動体が描き込まれており、真鍋が著書・論考において唱導した多様で選択性の高い遊びの未来像が表現豊かに示されている。また、描かれた内容は、多くの場合が自然のアナロジーが用いられている。花や鳥、魚といった動植物が、人間との境をあいまいにしながら展開し、自然と人工物、人間と動植物、地上と地下、陸上と水中などの境界が戦略的に曖昧化されている点に特徴がある。特に動植物を模した移動体も数多く登場している点を大きな特徴として指摘できる。

4. 今後の課題と発展

真鍋の著作やイラストレーションから見えてくる移動体の未来像は、ある特定の方向性ではなく、既成概念にとらわれない多様な可能性を模索し、それを「視覚的シミュレーション」として提示する点に特徴がある。わたしたちはそのイメージに触れることで、未来の移動体に思いをはせ、そして社会的な認知が進む。科学技術の成果はこの社会的認知を土壌として開花する。真鍋はそれを「SFアセスメント」と表現した。

こうした理解に立つと、本研究の成果発信は報告書だけでなく、今回収集・整理した真鍋による移動体関連発言やイラストレーションを資料集としてまとめことが妥当と考えられる。それはある種のティップス集として、移動体の未来とそれを支える社会を考えるために活用として広く活用できるものと期待される。今後は継続して資料集の整理・公開を進めていくことが課題である。

また、今回得られた知見を補完すべく、真鍋が積極的に発言したもう一つの分野である「教育」についても調査を行い、移動体論の考察深化を図りたい。

5. 発表論文リスト

現状なし。以下への投稿を予定。造形学研究所所報、第9号、愛知産業大学、2014.3、ほか。